

以上のように期せずして、私はオウム真理教に入信することになり、入信日は一九八八年三月一五日でした。在家信徒は、オウムでは、入信者は在家信徒として登録されました。在家信徒は、社会生活をしながら道場に通い、麻原や大師から修行上の指導を受け、立場にありました。私も教団の指導に従い、オウムの在家信徒として修行生活を送るようになりました。

ここで、オウムにおける教義・修行、そして麻原という存在について説明させていた。大きく必要があるでしょう。オウムの教義・修行の成り立ちについて、信徒が教義に感した現実性に留意しながら概観したいと思います。

オウムの教義・修行は、原始仏教・大乘仏教・密教・ヨガなどを源泉としていました。その教義・修行には、これら東洋の宗教・思想の原始的な教義・修行、つまり草創期の段階のそれの影響が色濃く見られたことに着目すべきでしょう。そのため、オウムが極めて「強力な」宗教になったのです。

それら東洋の宗教・思想の根本的な教義——たとえば輪廻転生や解脱・悟りのような——は、ヨガなどの実践によって得られた幻覚頁的経験に基づいています。つまり、宗教・思想の創始者や草創期の信者にこそ、教義は経験可能であり、現実の創始者や草創期の知覚されたはずで、たとえばロテラー・カークターやロテラーと「ガーター」を纏くと、仏弟子が教義ごわりの経験をしていた様子子が看取されます。

そして、その現実感が彼らの思考・行動に強い影響を及ぼしている。その下には、いよいよか。釈迦牟尼に教化されて、多くの人が今までの生活を棄てて出家したからです。

しかし時間の経過につれて、教義が理論的に精緻になる一方、一部の実践的な要素は欠落していき、そのために今や、教義は信者にこそ、直接的な経験と分離しがちになり、現実性という影響力が減衰して、いると言っても過言ではないでしょう。たとえば、来世の転生先を本気で心配する信者は稀ではないでしょう。

それに対してオウムの教義・修行の体系においては、原始的な実践が復活して、いきました。そのため信徒にとっては、主要な教義は経験可能でした。

結果として信徒は、教義を目で見、手で触れることが出来るようになった。認識するようになり、思考・行動が教義に沿うものになったのです。人が通常、自身の周囲に存在する「現実」に適応し

- *1 解脱・悟りを得たの麻原が認められた高弟。
- *2 記述が煩雑になるのと避けるために、オウムによる破壊的活動の理解に必要な部分のみを説明させていただきます。
- *3 激しい作法および行動を強かに規制する戒・厳格な出家生活など。
- *4 日テラー・カークター、ロテラー・カークターはそれそれ、仏弟子である僧尼僧による侍。
- *5 これは必ずしも否定的な意味ばかりではない。むしろ、修行生活の現代の社会生活が両方持つためには、ある程度必要を、この思われる。

て思考、行動するようになり。實際信徒は、教義の世界観に對する現實感が、この世に對する介れと凌駕する。一般社会から離脱して出家していきまされた。

このような影響力を有するオウム教義は、麻原の得た宗教的経験の根拠とした。つまり麻原は、予かどの經典に記載の行法を試みて宗教的経験を得、伝統的な教義を独自の検証・解釈してオウムの教義としたのである。オウムの教義は、このように成立したもので、者にも評価された伝統を継承した教義と、麻原の不適切な解釈に起因する有害な教義とが共存するに至りまされた。この有害な教義とは、日常生活も阻害するやれのことです。たゞこれは麻原は、一般社会は人々を苦界に転生させると説きまされた。信徒は、この教義に従い、一般社会における生活から離れ、遂には一般社会に對する破壊的活動をなすに至つたのでした。

次に、オウムの宗教的世界観について説明させていたにすぎなく思ひます。

教義では、修行の究極の目的は「最終解脱」でした。オウムでは七段階の解脱のステージが定められており、最終解脱はその最高峰でした。

最終解脱は、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜といわれる境地です。この絶対自由とは、カルマ（業）・転生する原因（から解放される）の世界に転生するものも、最終解脱の状態に安住するものも自由といふ意味です。絶対幸福とは、金・名誉など自分以外の外的存在に依存しなくとも幸福であるという意味です。絶対歓喜とは、自己が存在しなくとも、ただ散喜状態にあるという意味です。

「なぜ解脱しなけれはならぬか」といふ問いに、輪廻から解放されたい限り苦が生じらるからだと説かれました。これは、今は幸福でも善業（幸福になる原因）が尽きたら苦生する運命にあることが生じる原因（優位になり、必ず苦界に転生する運命にあること）が、この下です。特に、地獄・餓鬼・動物の三つの世界は「三悪趣」と呼ばれ、信徒が最も恐れる苦界でした。

たゞこれは地獄は、八つ裂きにされて苦しむものが死んでも、悪業が尽きたらまた何回も生き返り、同じ苦しみが果てなく続くという世界です。また、餓鬼・動物に墮したまま、幸福な世界に這上ることが、この難しくは、結局は地獄に墮したままです。ありの通りに

これに對して解脱は、すべての苦痛や桎梏から解放された崇高な境地です。この解脱に至るには、私たちが本来の最終解脱の状態から身を落として、この原因も除去する必要があると説かれていました。

私たちは本来、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜である最終解脱の

* 苦界とは、苦しみ、絶えぬ世界。仏教では人間界を指すが、この本記では人間界に限定しない。

境地に安住してまいりました。ところが私には、自己が存在するだけ
不完全な状態にあり、たのしみもわかず、外界の存在に對して欲望
を抱きました。その結果、絶対自由・絶対幸福・絶対歡喜の境地か
ら離脱し、輪廻転生を始めたのです。これ以来、私には欲望を充
足するたために、様ざまな行為（思念することも含む）をするように
なりました。

今の行為は情報として、私たちの内部に蓄積されていきました。
この蓄積された情報を「カルマ（業）」といひます。カルマのうち
苦しみが生じる原因が「悪業」です（カルマは善業も含みますが、
教団では通常、悪業の意味で使用されています）。教義では、世俗
的な欲望を満たすための行為は悪業に属するとされ、煩悩に増
大させ、今の煩惱・カルマに添った世界に転生して魂を肉体に宿し
業苦も重ねるようになります。たとえは、嫌悪の念や殺生は地獄
に、貪りの心や盗みは餓鬼に、真理を知らずいことや快楽を味わ
うことは動物に、今れ今れ転生する因になることとされていきました。この
ように自己のカルマが身の上に戻り、てくることを「カルマの法則」
といひ、これは中心的な教義でした。

カルマの法則に基づいて考えると、解脱つまり輪廻からの解放
に必要なのは、転生の原因である煩惱・カルマを減少・消滅する
こと、つまりカルマの浄化といひました。煩悩・カ
ルマも滅尽する、最終解脱に至るとされ、浄化が至上命令でした。才
ウムにおいては、カルマの（特に悪業の）浄化が至上命令でした。

この下、麻原について説明させていた、ただ必要があります。麻原
は教義上、カルマの浄化に不可欠な存在だったからです。麻原
は輪廻の原理とカルマの法則が支配する才ウムの宗教的世界におい
て、麻原は「神」救済者といえる存在でした。カルマも滅尽した
最終解脱者であり、苦界に転生する運命にあり、私たちがカルマを浄
化し、私たちが幸福な世界への転生、ひいては解脱に導くこと、
さらには神通力と具するとされ、仏教において解脱者に備わるとされ、
今の神通力のなかには、仏教において解脱者に備わるとされ、
「六神通」があり、六神通とは、天眼通（遠隔透視）、天
耳通（遠隔透耳）、神足通（空中浮揚）、地心通（鏡心）、宿命通
（自他の前世・来世を見通す）、漏尽通（人の煩惱の状態を見極め
る）の六つの能力のことです。この宿命通・漏尽通も駆使して、
麻原は人のカルマの状態を見極め、これを効果的に浄化する指導が
できるとされていきました。

さらに麻原は、私たちに「エネルギー」を注入して最終解脱状
態の情報を与え、また私たちが蓄積してきたカルマを背負うにつ
まり、カルマも引き受ける、これも主張してまいりました。このように
カルマの移転は、「エネルギー交換」あるいは「カルマの交換」と
いひ、悪業による行為と善業を積むこと、
煩悩とは、私たちが苦界に結びつける欲望や執着

水一 悪業による行為と善業を積むこと、
煩悩とは、私たちが苦界に結びつける欲望や執着

呼はれていました。このエネルギー交換は、接触でも、会話・思念でも——私にもまた麻原の一方が相手も思念した場合でも——さては麻原に対する布施でも、私にも麻原の間に何らかの「関係」が生じれば、程度差はあれ起るべきとされて、いました。

私は様ざまな状況・様態で、麻原のエネルギーを体感しました。その感覚は、麻原が強く意識される状況下は必ず起りました。たとえば、私が麻原の近傍にいるとき、あるいは麻原と（電話で）話して、いざこざ、瞑想において麻原を觀想して、いざこざなどです。なお、麻原と距離を隔てた状況において、突然生起することもありました。

またそのエネルギーは、あるときは気体、あるときは液体のような感覚を伴って、私の身体に流入してきました。熱く感ずるときもあれば、冷たく感ずるときも、温度を感ずることもありました。そして、このエネルギーが私にこぼれて、麻原が神格を有する「状態」になった。ゆえわたりました。これは、人の五感が奏で得るも透明になり、身えわたりました。これは、人の五感が奏で得る、至上の感覚でした。

これが麻原の「最終解脱者の心」の状態だ。私は思いました。その麻原の「心」の状態は「私」の状態とは別次元のものを感じされた。からです。これは人間も超越した、まさに神のものでした。

このようにも経験も自分一人の人々が、この経験は自然の過程であるよりはむしろ一つの奇蹟であるという感じも、多くの人は当然である。これは、私は声が聞こえたり、光が見えたり、幻を見たり、自動的な運動現象が起るたりする。そして、個人的な意志が放棄されたあとでは、つねに、ある高い力が外から流れ込んできて、刷新され、安心を得、潔められ、義を得たという感じが、自分の本性が根本的に新しく生まれかわったと信じてさせるに足るほどふしぎな散じを与えらるものである。

これは、心理学者ウイリアム・ジェイムズの著書「宗教的経験の諸相」に記載されている宗教的経験です。この描写から、エネルギーと感ずるという宗教的経験の普遍性がうかがえます。つまり、この種の宗教的経験の「型」が存在するということになります。経験者において、高い力が外から流れ込んで、潔められるという感覚が誘起されるような。

信徒の中にも、私と同様の経験をする者がいました。このような宗教的経験が誘起されたので、麻原の意識される状況になり、その型の

＊このようにも経験は、「二度生まれ回心」（本記の序章二頁）の、（辨田 啓三郎記 岩波書店）

「高い」存在——すなわち神——と認識するに至ったのである。

「なぜあの男が——麻原が教団において絶対的存在になったことに對する疑問の声を聞きます。信徒の脳内には宗教的経験によつて、麻原は神である」という認識——感情、あるいはムドといったほうの正確かもしれません——が誘起されたのです。麻原のいかなる言動を見ようとも、それに対する理性的判断を飛び越えて、カインレクトに。

また私は、麻原のエネルギーが注がれると、自身のカルマが浄化されるのも実感しました。その経験も、「潔められる」という感覚が誘起されるこの型の宗教的経験の性質に起因するものでしょう。さうして「カルマが浄化される」という感覚のみならず、カルマの浄化によつて起るべきとされる「現象」が相伴つて、私の身の上に現れるのでした。

輪廻の原理とカルマの法則が支配するオウム、宗教的世界においては、「カルマの浄化」がすべてでした。しかしカルマの浄化には当然のことながら、入信前に私たちが一般社会で培った経験・知識は役に立たません。それはむしろ、煩惱そのものの、カルマそのものとされてしまいました。

今の一方で、麻原の指導によつて、あるいは彼のエネルギーによつてカルマが浄化されたことを示す効験が、身の上で現れる……この状況に直面して私は、自身が多分非力なのに對し、麻原は底知れぬ力を持つことも思い知らざるを得ませんでした。

では、在家信徒の基本的な修行（教義の学習・教義の実践・奉仕ヨガの行法）の概略を説明致しませう。オウムの修行の眼目はもろろん、カルマの浄化です。そしてカルマの浄化には麻原の力が不可欠でした。オウムの修行体系には彼の存在が至るところに編み込まれていました。

教義の学習の内容は、魂が輪廻転生する世界観・苦界への転生の因となる行為（悪業となる行為）・解脱の因となる行為（功徳となる行為）などでした。これらの教えは、道場で開催される、麻原による説法会や大師による勉強会で説かれていました。このような催しには多くの信徒が参加し、道場が満員となるのが常でした。教団の信徒は、誘いの電話をかけたからです。

また、側頭葉において電気的揺動が起ると、神と結びつく、あるいは一体となる感覚が生起するところを研究者もいふ。（前出 Dastinger）

私の経験では、麻原から誤解され酷く叱責された際にもエネルギー交換が起ると叱責されたことに對する不眠の念は喚起されなかった。麻原のエネルギーの強さ、清らかなる左側され、麻原に神性を感したからだった。

その経験の具体例については、以下の適切なコンテクトにおいて述べよう。

麻原はカルマを自ら浄化できる立場にあつたため、彼が望むものは、やはり自由な行動と回避した。他方、信徒は三悪趣に転生する恐怖から、カルマ（悪業）となる

つまり、悪業と名の行為を避け（守戒）、功德と名の行為に励んだのです。

悪業と名の代表的行為は、「十戒」をして禁じられていました。これは、不殺生（殺生をしてはならない）・不偷盗（盗んではいけません）・不邪淫（邪淫をしてはならない）・不妄語（嘘をついてはいけません）・不綺語（必要のない言葉を話してはならない）・不悪口（悪口を言ったりはならない）・不両舌（人と人とも仲たがいをせず言葉と話をしてはならない）・不悭貪（むさぼってはいならない）・不瞋恚（憎しみを怒りと発してはならない）・不邪見（真理を否定してはならない）です。十戒は、仏教の導入したものです。ただしオウムの十戒は、仏教のそれとは意味が異なる部分があるかも知れません。

ここで無視できないのは、オウムでは現代人の日常的な行為の多くが悪業とされたことです。今のために、教義が深く受容された信徒は、日常生活に支障を来す場合がありました。

十戒の「殺生」は、虫を殺すことも含まれました。もうらん、地獄、虫は殺人よりも業は軽いのです。殺すのが教義上、一匹殺しただけでも地獄に転生しかねません。た。

で、すから、私は突然の宗教的回心以来、釣りができなくなり、また、釣りが最大のレクリエーションだったのにもかかわらず、釣りを断念せざるを得ません。運動不足の解消のため、再開した剣道も断念せざるを得ません。暴力とみなされて、た。学生にと、では決して安価とはいえない防具をやらせて、間もなかった。た。致し方ありません。

また、昨今、グルメがもてはやされていますが、これはオウムの感覚では「貪り」にほかなりません。ですから、美食の追求は、餓鬼のカルマとして敬遠されていきました。

食の貪りは、一般的に感覚に比べ、かなり厳しく説かれていました。次は、私が在家信徒時に聞いた麻原の説法です。

鬼だね	れれれ	鬼だね	れれれ	鬼だね	れれれ
おやつも食べ	まじよう	おやつも食べ	まじよう	おやつも食べ	まじよう
いワインでも	飲みまじよう	いワインでも	飲みまじよう	いワインでも	飲みまじよう
デーでも飲み	まじよう	デーでも飲み	まじよう	デーでも飲み	まじよう

これは、餓鬼だね。

*1 虫と五の〇に殺すと、人と一人殺した場合の悪業に相当するとされた。
*2 麻原の日記「念と誓」(http://religion.web.infoseek.co.jp/ または http://tochugesha.web.infoseek.co.jp)より。
*3 この解釈は、信徒の質問に対する麻原の回答として、オウム出版の書籍に記載されていた。ただしこの教えは、一般的にはなかった。またオウムは後に、武道を奨励するようになった。

とくらで、貪りというのはいのカルマだ。たよね。そうして、貪・瞋・癡というのはいのカルマだ。たよね。それは、いかに、えは朝起きて、よく考えて、さあ朝食、何食べようか、と、食べる。それか、朝食が終わった、次、昼飯、何食べようか、と、考える。そして、食べる。で、昼飯が終わった、おやつか、と、考えた。うれし、わい、と、食べる。そして、おやつが終わった、さあ、今度は夕食、何のデイナーも食べようか、と、食べる。で、寝る前、食べる。と。

このとき、心は、何に集中してゐるか。どうだ。食い物に集中してゐるよ。ね。これは、どうやら、睡眠時間をはずして、いつも食いに集中してゐるらしい。これは、餓鬼のカルマだ。よ。ね。わか。部の道場） 言つてゐることは、（一九八八年九月一日 東京本部道場）

スポーツによつて快楽を味わうことさえ、動物のカルマとされてしまつた。次は、右記の説法の続きです。

はい、次。トヤあ、今まで曖昧だつた、動物と天界の差だ。動物も天界も同じようによい無智のカルマによつて生じらる。これは、中間状態に入つたとき、その現れ方が違つてくるわけだ。ごよ、うに、して、違うか。と、い、い、い、かな、まず動物は、たよ、たよ、さん、楽しい、ガイ、ジョ、ン、が、出、て、ま、す。

例えば、ボールを返すか、かけてくるガイジョンド、か、さ、う、じ、猫が、玉取つてくるよ。ね。あ、あ、あ、は、あ、な、な、方、に、は、あ、あ、は、サ、ツ、カ、ボールを蹴つてくるよ。う、に、見、え、る、か、も、い、れ、な、い、よ。よく、考、え、て、こ、う、ん、サ、ツ、カ、ボールを蹴つてくるよ。と、両、方、で、猫、の、両、方、が、こ、う、持、つ、て、こ、う、ね、玉取つてくるよ。と、同、じ、だ、と、思、う、か、違、う、と、思、う、か。

現象的には、同じだ。ね、これは、

あ、あ、あ、は、た、よ、ボールが、飛、ん、で、ま、す、あ、あ、の、ボ、ール、を、バ、ツ、ト、で、一生懸命ひっぱたいてくるよ。で、その、飛、ん、で、ま、した、ボ、ール、を、ね、あ、あ、は、は、取、つ、て、ま、す、ま、す、ま、す、これは、た、よ、犬、に、棒、切、れ、を、ボ、ツ、と、投、げ、て、犬、が、バ、ツ、と、走、つ、て、い、つ、て、あ、あ、の、棒、切、れ、を、く、わ、え、て、バ、ツ、と、度、つ、て、く、る、の、よ、玉、が、カ、ン、と、飛、ん、で、い、つ、た、と、同、時、に、走、つ、て、い、つ、て、キ、ヤ、ツ、チ、す、る、の、よ、同、じ、か、違、う、か、考、え、て、ご、ら、ん。

これが、動物の無智のカルマ、ねえ、生まれ変わる条件なん

お、あ、十戒の「不邪見」は、真理を否定してはなすな、い、という意

味、下、した、です、から、実質的に、オウムの教義を疑うことは禁じられていたのです。悪業になることを。

*1 貪・瞋・癡とは、貪り・怒り・無智（真理を知らないうこと）。

*2 教団発行の「導師フアイナルスピーチ」五、説法集 上より。

*3 中間状態とは、死から次の転生までの間の状態。

信徒において、何らかの引き金によつて、条件付けられる形成される。三意趣に転生する恐怖のために、悪業となる行為は下さなく
ります。その状態に陥つた信徒は、考え方や行動が周囲の人へ非
信徒への嚙み合ひしません。悪業に因するオウムの教義は、常識や
一般人の行動様式とは相容れなから下す。その結果信徒は、一般
社会における生活にストレスと感ずるようになり、出家へと向か
つて下す。

地方 功德となる行為は、麻原や教団に對する奉仕と説かれてい
ました。在家信徒が可能な代表的な奉仕は、布施と布教（入信勧誘
チラシ配りなど）でした。

布施は、たゞえば財産を教団に寄贈することです。物に對する
欲望や執着——苦界に転生する根本的な原因——も減少するとされ
ていました。これは、欲望や執着とは逆の行為とすることによつて、
これらの心の衝きも減衰するといふ考えです。

苦界への転生を避け、幸福な世界への転生、めづかしいは解脱に近づ
こうと、信徒が進んで布施したことは理解してはいたけれど、よう
か、信徒も悪業を浄化しない限り、三意趣に転生するとされたから
下す。前述のように自奉的な行為が悪業になると下すから、信徒も
入信前は悪業を蓄積してきたことになると下す。下すから信徒は、
悪業を死ぬて浄化しようとしていました。

可能な信徒は、何千万円単位の布施をしてはいたよう下す。私は
学生でいたから高額な布施は無理でした。教団が大学祭に参加し
て布教するための費用として、二五万円程度の布施をしました。今
のときは、意義ある善行ができたこと随喜の念を覚えました。布施は
三意趣に転生する人々を救済するため設立されること考えついた
から下す。

布教は、入信勧誘やチラシ配りという形態が代表的でした。その
実践は、真理——つまり、麻原やオウム——との縁を深めるとされ
ていました。他も真理に結びつけると、カルマの法則によつて、そ
れが自身に返報されることの考えから下す。真理との縁がないと、永
遠に救済されず、業苦にさいなまれることになります。下すから真
理との縁の形成は、オウムでは重視されてはいたの下す。

入信勧誘については、教団は在家信徒に對し、家族や知人を勧誘
するよう指導してはいました。非信徒は悪業を積み続け、三意趣に
転生するのを、オウムに入信させて真理の實踐をさせなければなら
ないといふ訴えから下す。

それに応えて、在家信徒は懸命に入信勧誘してはいました。家族や
知人に、来世において苦しむ思いもさせたくないという気持ちから
下す。しかし、今の気持ちを通じるとはほとんどなく、在家信徒
が集まること、それを憂える声が聞かれました。

また在家信徒は、大学にサークルを設立して入信勧誘してはいました。
大学祭に参加し、麻原の説法会などのイベントを開催したの下す。

しかし、学生が入信に至ることは、まずありませんでした。大学祭という開放的な雰囲気は助けられ、イベントにはかなりの人数が集まりました。

千ラシ配りについては、麻原の著書の宣伝も東京二三区の全世帯に配布しました。午後九時頃になると、有志の在家信徒が道場に集まります。有志は担当の出家者から住宅地図を渡される。同輩の車で現地向かいませす。そして住宅地図と照合しながら、一軒一軒のポストに千ラシを入れるのです。

また在家信徒は日中、街頭や大学のキャンパスでも千ラシ配りもしました。

布施を含む奉仕行は教義上、さらに重要な意味がありました。麻原が意思する善行の実践によって、彼らの「絆」が強まることされたのです。その結果、麻原の「エネルギー」を得ることによって、それによって自身のカルマが浄化されること説かれていました。

これは、ヨガにおける「バクティ・ヨガ」とは、奉仕によって至高の存在と合一する方法です。

後述致しますが、私は奉仕行によって、麻原のエネルギーが頭頂から流入するのを同常的に感ずるようになりました。

また信徒は、麻原のエネルギーを得るために、「インシエーション（秘儀伝授）」を受け付けていました。インシエーションとは、麻原が信徒にエネルギーを注いで最終解脱状態の情報を与え、また信徒のカルマを背負う「儀式」です。加えて、インシエーションを受けると、麻原との縁や絆が強まり、解脱に至る因が培われるとされてきました。

インシエーションは種々ありましたが、最も代表的なのが「シヤクティ・パット」でした。シヤクティ・パットにおいて、麻原は信徒の額に親指を当て、一〇分間わたってエネルギーを直接注入しました。このとき多くの信徒が宗教的経験を得、麻原に対する帰依を深めたのです。

インシエーションを受けられた場合には、教団の「布施」をする必要がありました。シヤクティ・パットの場合には、五万円以上の布施と定められました。ただし、これを受けられた人の講習費が、すでに六万円必要でした。そのほかのインシエーションの最低額は、瞑想法の伝授（DNAインシエーションを含む）が三〇万円、血のインシエーションが一〇〇万円、PSI（パリーフェクト・サルヴェイ

- *1 この絆は、「コゲル（宗教的指導者）麻原」との「パイプ」と形容された。このパイプを通じて、距離を隔てていても、麻原のエネルギーが弟子に流入するとされた。
- *2 この宗教的経験が起るメカニズムについては、第二章第五節で述べる。
- *3 DNAインシエーションでは、培養された麻原のDNAを採取する。
- *4 血のインシエーションでは、麻原の血液を採取する。密教の伝統的インシエーション。DNAインシエーションは、血のインシエーションの代替。
- *5 PSIでは、麻原の脳波を教本ルトの電圧に増幅し、これを頭部に印加する。PSIにはいくつものランクがあり、その最高ランクのものが一〇〇〇万円。

イシヨシ・イニシエーション)が一〇〇〇万円だった。
 このようにイニシエーションは高額だったのが、これを受けのため
 に借金までする在家信徒も稀ではなかった。前記の布施も含め、文
 字どおり金に糸目を付けないほど信徒がオウムに傾倒した理由は、
 麻原がカルマを背負う力を具有していたからにはほかなりません。力
 ルマを浄化したまじく苦界に転生するのを防ぐから、カルマを背負って
 くれる麻原は、まさに「神」救済者としていた。その神の力を、信徒
 はイニシエーションによって体感していたのです。

では、オウムで実践された修行として最後に、ヨガの行法を説明
 致します。

ヨガの行法には、脳を刺激する作用があります。その作用のた
 めに信徒において、教義が示すことおりの幻覚的な経験が誘起され、
 オウムの宗教的世界を現実として認識するに至ったと考えられます。
 たゞし、信徒のその現実感の教学の証明をするべきのような論
 理的思考――教義との結果とは単純にいえません。オウムの宗教的世界観
 は正しき――の結果とは単純にいえません。つまり、
 行法による宗教的経験には、論理的思考を超えて、よりダイレクト
 に人の感覚に訴える要因が存在するからかもしれません。前述の、高
 力が外から流れ込んできて、潔められるという宗教的経験のよう
 に、その可能性については、後述致します。

オウムで実践された行法も理解していただくためには、教義にお
 ける人体観の知識が必要になります。

まず、オウムの修行では、人体内で発生するエネルギーが
 「中心」の役割を担いました。このエネルギーには、「クンダ
 リニ」^二と呼ばれるものや、「氣」と呼ばれるものがあり、信徒にと
 って、これは「實在」でした。

クンダリニ^二は尾底骨付近から発生し、背骨に沿って存在するこ
 とされる「管」の中を上昇するエネルギーでした。私はクンダリニ^二
 を「粘性のある熱い液体のよう」に感じました。

気は、気功でいうものと同じと考えていた。ただ、
 ません。私の経験では、気は気体のよう感じたり、
 と移動したり、あるいは全身に充満したり、
 多様な感覚をもたせました。

このエネルギーの流れによって、私には心滴(意識)も運ばれ
 解脱などの宗教的経験をしたり、あるいは死後にはカルマの定める
 世界に転生したりすると説かれていました。したがって、
 福な世界への転生を達成するための必要が、
 せ、次にエネルギーを適当に制御する必要が
 出来たりするのが、ヨガの行法だったのでした。

オムで実践された、麻原の「クンダリニ」が活性化することであり、
 解脱への第一歩、容易に覚醒することでした。

エネルギーの制御のための行法として代表的なのは呼吸法であり、これは激しい出入息と深呼吸・保息（息を止めること）の組み合わせといえます。また呼吸法の作用は、クンダリーニの覚醒や管の浄化・エネルギーの強化などとされていきました。

管の浄化とは、これを詰まらせているカルマを浄化し、エネルギーが通るようになることです。カルマは管に蓄積し、エネルギーの流れを阻害するにすぎないためです。呼吸法は、管が詰まっていたときに、エネルギーの流れをスムーズにするために行われ続けています。

そのような話は現実性を欠く……と思われがちかもしれませんが、これは私は、今の教義における反応の心身に現れる状態にありました。エネルギー・管・カルマ（悪業）は、心身の好不調とも直結する無視し難い存在だったのです。

たえば、私が知人に對し、強い口調で苦情を言ったときのことです。今の瞬間、私の胸に衝撃が走り、今の部位の管が詰まっていたのだと知りました。知人に苦情を言ったことが悪業になり、今の悪業が管を詰まらせたとおのようになり、たえば、私は胸部に異和感を覚えるようになり、たえば、私は、血管を圧迫されたときの感覚でしようか。同時に、それによって身体に満ちていったエネルギー（氣）が失われ、私は消沈した精神状態になり、たえば、

今の後、私は呼吸法と、麻原のエネルギーを得るための瞑想によって管を浄化し、この心身の不調から脱しました。麻原の教えに従って、何から何まで教義どおり行いました。

また、エネルギーの強化は、解脱や幸福な世界への転生のために不可欠でした。エネルギーが強化されて初めて、私たちが意識に至る高の宗教的世界に誘われ、解脱や幸福な世界への転生が可能になるにすぎないのです。このような教義は、極厳修行において呼吸法などを行って、私を含む多くの信徒が幻覺的に経験してまいりました。

次に、瞑想について述べさせていたいただきます。以上の修行は、瞑想のための準備と位置付けられるでしょう。瞑想は、修行の果実を得る場として、オウムでは最も重きを成してまいりました。

瞑想はまず、修行者としてふさわしい行動——つまり、麻原との縁を深める行動・カルマを浄化する行動——を習慣付け、目的で行い、それによって、その瞑想においては、麻原への帰依を誓う詞章を唱える・自身に執着する対象をすべて麻原に捧げるイメージをす

る・麻原に自身の悪業を懺悔し、カルマの消滅を願う詞章を唱える。麻原に加護・導きを願う詞章を唱えるなど、行法をいたしました。

*1 極厳修行では、一日二十四時間が修行。解脱のために故の月以上修行場合もある。

*2 私は十悪を犯し、カルマの契約を破った。すべて悪業を告白し、二度と同じ過ちを犯しませんゆえ、どうかカルマを消滅してくださいと唱える。

*3 今の現象界の喜びは幻です。……カルマの毎える絶対自由・絶対幸福・絶対救済は輪廻を超えて存在しない。……真実です。……幻影が訪れても、それを打ち砕き、真実の道を歩みますゆえ、どうか加護くださいと唱える。

また、麻原を親想するに、よってカルマを浄化する瞑想法もあ
 りました。この瞑想においては、麻原のエネルギーが自身の頭頂か
 ら流入し、カルマを浄化するイメージをイメージしました。
 私は実際に、そのイメージどおりの幻覚的な経験をしました。そ
 してやがて、瞑想中に限らず日常的に、麻原のエネルギーが頭頂か
 ら注がれるのを感ずるようになったのです。
 今して瞑想は、重要な宗教的経験を得る場でもありました。麻原
 の力によってカルマが浄化されると瞑想中、信徒の意識は肉体から
 離脱し、種々の宗教的世界を経験します。今のような宗教的経験を
 経て、すべては執着に値しないことを感得すると、解脱・悟りが訪
 れるのです。

*1 入道し解脱・悟りについては、在家信徒時ではなく、出家後の極厳修行において
 経験するケースがほとんどだった。